



フォーリー・ベルジュール鏡に映る淑気かな
雪晒魚沼晴の田の平ら
戦傷の漁師も春の欸乃に
黄犬忌の桜大樹の鼓動かな
青菜積む角より春の夏目坂
たんぼば黄人に体温ある如く
春の磯うとまれ遠く抛る石
春浅し目に憂ひある深海魚
花プラム料理手帳に妣の文
風に飛ばされてゆく慕情かな
恋猫の棒も持たずに出陣す

*

黄砂降る慶良間の沖に馬艦船
初雪や悟られぬよううきうきす
父母の待つや翠微の春灯
注連飾るメディシンボール空元氣

金子圭子
米山節子
眞榮城いさを
小澤準一
田村道子
北村宣枝
許勢元貞
上脇邦子
ビュニャールしづ子
芳川莞久子
石川定雄

渡嘉敷皓駄
宮澤和子
堤保徳
富岡詔子

水雲食ぶ子にしてやれることの無く
胸に吃水線や春動きけり
くれなるの飼料車来たる牧の春
我武者羅の時を遠くに水仙花
かやねずみからりんくるり姫始
紙銭を供ふ墓前の十六日祭
白菜をざくざく切つて吾を許す
遠き日の父の鞆轡今も揺れ
鴨よこんなに無防備でいいのかよ

*

木の根明くまこと十戸の青鬼村
寒の暮航空灯の蠱惑なり
マフラーを巻きて小顔になりけり
冬薔薇手箱の中に妣の紅
雨上がる祝歌の如ねこやなぎ
河原石みんな笑つて年迎ふ

角田良子
神林利一
中曽根英子
原隆子
石田九吾
木下めぐみ

鈴木臣和
岩井かりん
増田義幸
玉木愛子
栗原利代子
三島信子
垣内みか
藤原ひとみ
古畑富美江

岳の源泉 四月 488

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

はじめに。新型コロナウイルスの蔓延により世が沈む。こんなときにどうするのか。じっくりと俳句の行く末を考え、俳句以外の知恵を広くふやすことを考えてほしい。

雪晒— 廃れゆく地域の手工業を詠もつ

雪晒 魚沼 晴の田の平ら 米山 節子

雪晒は雪の上に麻布を晒し漂白する。小千谷縮が名高い。「魚沼晴」とは、地名に力がある。鄙びた地貌のひかりが満ちたことば。雪に覆われた「田の平ら」とは越後の米どころの裏の貌。腰を落ち着けた作。

戦傷の漁師も春の欸乃に 眞榮城いさを

「欸乃」は舟歌。宮古島の漁師詠だけに、戦争体験も単純ではないであろう。舟歌に、老いてなお盛んな漁師の今に生きたる喜びがある。

黄犬忌の桜大樹の鼓動かな 小澤 準一

ドナルド・キーン氏は二〇一九年二月二十四日逝去。九十六歳。忌日を「黄犬忌」と。氏は周知のニューヨーク市生ま

花 プラム料理手帳に妣の文 ビュニヤール

料理の献立を書いたノート。そこに挿まれていた亡き母の献立メモか。妣の日常が偲ばれる。花プラムもお洒落。

凧に飛ばされてゆく慕情かな 芳川莞久子

思い人が去ってゆく映画の別れのシーンのような。慕情の抽象的な情念が、凧により具象の手がかりを得た。佳句。

恋猫の棒も持たずに出陣す 石川 定雄

雄猫は時期からして棒の用意はあろうが、ここはやんちゃ小僧が持つ棒。適度な可笑しみがある。

他に同人作品から推薦候補作を掲げる。

凧にまじる羽音のごときもの 川村 五子

今月の秀句

フォーリー・ベルジェール鏡に映る淑気かな 金子 圭子

パリの九区にある高名なミュージックホール。その鏡に我が身を立たせ、新年の淑気をとほ、うっとりさせる贅沢三昧の作。ちびちび、おずおずした句よりも楽しい。想像句、作りのものなど、批評も自由。なによりも挑戦してみる。

れの日本文学研究者。大好きな桜の木に手を当て、その鼓動からご本人を偲んだ構図がいい。「鬼怒鳴門」の当て字も歌舞伎役者めいた凄みがある。

青菜 積む角より春の夏目坂 田村 道子

漱石山房へ向かう夏目坂。角の青物屋の店先に折から青菜が山積み。囁目作品の臨場感が机上の想像句の完璧さ、巧みさを退け、中途半端な感じを読み手に与える効果が面白い。

たんぼぼ黄人に体温ある如く 北村 宣枝

たんぼぼの花の視覚を体温という触覚で受け止めたさりげなさ。完結した作品ではないが、句に体感がある。

春の磯うとまれ遠く抛る石 許勢 元貞

よく沖へ投げる石礫。それほど憎まれたのではないが、句にめりはりを出すために「うとまれ」と見たのである。

春浅し目に憂ひある深海魚 上脇 邦子

深海魚の目の表情が乏しいさまを「憂ひ」と見た。一つの見方だ。他に捉え方はあるが、まず共感を呼ぶ見方を提示。

かんべきは滅びのはじめ寒卵
眉しかと引けば二月の山河燦
空に顎突き出し葡萄剪定す
春はそろりそろりと出づる狂言師
葬送に大きな拍手冬木の芽
竹岡みち子
木幡 テイ
河西 将
町田 愛子
玉井 利之

初雪— 軽く置き、逸る気持を抑える工夫

初雪や悟られぬよううきうきす 宮澤 和子

初雪を迎えた昂りを詠んでいるが、他の昂りでもいい。初雪を軽く被せるいい方は難しいが、掲句は下句も昂りでありながら、軽く置かれている。何を置いても苦労を表に出さな

いで表現する。好調。句への取り組みに探求心がある。

父母の待つや翠微の春灯 堤 保徳
父母の居処を捉え、現実とも他界ともとれる曖昧さがなかなか巧い。翠微は山の中腹。春灯もおぼろ。春の灯と春灯は微妙に違いがある。やさしい表現に風格がある。

注連飾るメディンボール空元氣 富岡 詔子

「メディンボール」はリハビリ用の運動器具の一つ。背筋を伸ばす運動に用いるボール。正月のリハビリ室風景か。快活な光景が心地よい。専門用語が生かされている。

水雲食ぶ子にしてやれることの無く 鈴木 臣和

父としての感懐か。身体面で心配がある子の場合、親の気持は辛い。極めて良心的な親の気持が伝わる。当然、子は親の心を理解するものだ。

胸に吃水線や春動きけり 岩井かりん

胴切れの代表句になろう。読みは「むねにきつ／すいせんやはる／うごきけり」と読む。沖に向く。そこには明るい春がある。そんな期待を胸に出発する新人生や新社員。いつの世でも胸打つ佳吟ではないか。とりわけ沈んだ現代には。

くれなるの飼料車来たる牧の春 増田 義幸

欧州の牧を思わせる。「飼料車」への着眼が楽しい。ゆたかな感性が捉えた鮮やかな風景だ。好調なのであろう。大いに飛躍を試み、足元がぐらぐらしたらまたやり直せばいい。

今月の秀句

黄砂降る慶良間の沖に馬艦船 渡嘉敷皓駄

沖縄本島の西方の諸島。かつての沖縄戦の激戦地。今大陸からの黄砂が降る中、慶良間の沖に素早い馬艦船が出ている。マラーン船は十八世紀、大陸から来た船。戦時ではないが、緊迫感がある。海に降る黄砂の句は珍しい。楸邨ばりの骨太な句が本領。手堅い。

なる。あるいは弱い人間のことか。難しい時代に。

他に岳集から推薦候補作を掲げる。

春隣ははの木箱に母子手帳	田中真由美
寒晴の巫女の風呂敷包みかな	上村 敦子
海風にもべつびんのゐるさびしらよ	奥山 源丘
カーテンをやや引く八百屋冬西日	山田 寿子
宙返りしてゐる胎児薄氷	佐藤 由美
月の砂漠夫へと唄ふ三ヶ日	宮崎久仁子
マヌカンの腕嵌めてゆく春間近	市川美八子
授かりし赤子のごとき樹氷かな	正村 和子
古本に干草の香や小正月	辰野 利彦

ねこやなぎ―祝歌の比喻が見事

今月の秀句

河原石みんな笑つて年迎ふ 木下めぐみ

生き方は地味。いや滋味がある。平凡な河原石が白い顔でみんなにこにこ。なんと幸せな着想か。気持が格別あたたかい人であろう。河原石は毎日眺めていても、こんな豊かな思い付きはなかなか出てくるものではない。感心した。佳吟。

我武者羅の時を遠くに水仙花 玉木 愛子
そんな気持になりましたか。まだまだ我武者羅結構。長い句歴の愛子さん。句に艶がある。早々悟らないでね。

かやねずみからりんくるり姫始 栗原利代子

かやねずみのひめはじめ。大阪の姉御かとびっくりした。

紙銭を供ふ墓前の十六日祭 三島 信子

旧暦一月十六日は後生の正月といわれ、ご馳走を持って墓へ詣でる。宮古や八重山での正月行事。那覇ではアラミタマ。沖縄は信心の国と思う。

白菜をざくざく切つて吾を許す 垣内 みか

許しがたい思いがあった。拘った。しかし、思えば所詮は自分の気持次第と悟ったというのであろう。夕飯に使う白菜は知るや知らずや。気持が柔軟な人だ。

遠き日の父の鞆轡今も揺れ 藤原ひとみ

父恋の句。父と一緒に乗ったぶらんこ。父と小さな私と。しずかに揺れて。思えば、ここが愛情の核か。

鴨よこんなに無防備でいいのかよ 古畑富美江

敵の怖さを知らない鴨。大通りを平気で横切り、獣の餌に

雨上がる祝歌の如ねこやなぎ 石田 九吾

早春の雨上がり。川辺のねこやなぎのしっとりした輝きを「祝歌」とは、ささやかな飛躍。巧い。これから始まる春の寿ぎでもあろう。軽々とやさしく仕上げ、句に品がある。

木の根明くまこと十戸の青鬼村 角田 良子

北安曇郡白馬村青鬼（あおに）。十戸の集落。スキーのメッカ。ようやく春が来る。その喜びが明快に描かれ、地名が抜群にいい。節分が終わり春を迎える。これこそ麗しき山村。

寒の暮航空灯の蠱惑なり 神林 利一

季節はどん底。暗くしんしん身に沁みる寒暮。空をゆく飛行機の外部照明灯だけがひとり華やか。「蠱惑」の漢語が魅力的。

マフラーを巻きて小顔になりにけり 中曽根英子

華やかなマフラー。中に埋まった貌。寒い時だけに内外の相対感もあろう。錯覚ではなく、意識はこんな感じか。

冬薔薇手箱の中に妣の紅 原 隆子

母はいつも美しく詠いたい。母こそ永遠のいのち。

寒昴ナカムラといふ子が生まる 峯 敦子

星座の世界に「ナカムラ」星誕生。天上からアフガンをじっと見ているか。アフガンよ永遠にと。

○気になる表現

すでに着想があり類想か

例句 戦後とふ戦前なりし麦青む

昭和戦後は次の戦いの戦前に当るのではないか。鋭い指摘だが、個人的な気付きではなく社会的な状況への考察なので、既に誰かが言っているれば、後の人は後塵を拝することになる。

例句 重さうな春満月の上がりけり

巧みな句であるが、やはり飯田龍太の次の句と着想が同じであろう。多分ご自分が気付いたのであるが、先人が着想していれば残念ということになる。

例句 紺紺春月重く出でしかな 飯田龍太『百戸の谿』

語感が馴染めないのに勧めない表現

原句 二ん月は風花の季とおぼえたり

原句 二ん月の早くも過去世となりにけり

既に指摘したが、二月を四音にするため「二ん月」との言い方は語感が馴染めない。古い。三音で使える位置を考える。掛詞を強引に用いない

原句 鈍色の空を混ぜ込み納豆汁

「混ぜ込み納豆汁」は冬の空の混濁の様子を納豆汁に合わせて表現したものであろう。強引すぎないか。技が目立ちすぎ。さりげない言い方でないと、読み手が馴染めない。

原句 吊し雛不苦勞と成す妣の衣

田添 博美

考えましたね。妣（亡き母）の衣を使って梟のかたちの吊し雛を作った。「梟」（ふくろう）と「不苦勞」を掛けた。もう苦勞はないねと亡き母に語り掛けたというもの。採用しましたが、凝り過ぎかな。こんなに凝らない方がいい。

何を表現したいのかわからない。他方面白みあるや？

原句 真下に闇外側にあり一輪轡

原句 春の朝雨戸開けるや白き月

前句は何を表現したいのか、意味がとれない。後句は光景はわかるが、面白みがわからない。

○このように推敲し添削する

あまり専門的すぎると多くの読み手は理解しにくい

原句 解剖ラボのまはりに揺るる冬すみれ

「解剖ラボ」は解剖ラボラトリ。人体解剖模型などが吊された解剖室を想像されたい。専門用語。少し難しいかな。

添削 人体模型まはりに揺るる冬すみれ

これだと理解がすすむ。どうであろうか。

語順を工夫するのがいい

原句 この地球の歪み見つむる寒の月

中井 一洋

添削 寒の月地球の歪み見つめをり

この地球と強調する意味があまりない。もう少し特殊なことがあれば強調する意味が出る。ここは鎮静した表現がいい。

原句 雑木林団栗踏み分け縄文人

池田 康樹

添削 団栗を踏み分けてゆく縄文人

「雑木林」が要らない。団栗だけで場面が連想できる。